

阿弥陀町魚橋には、東洋金
属熱錬工業所があるが、その
敷地の字名は「瓦」である。
なぜ地名が瓦なのか、何か意
味ありそうな名前である。

この地名が、明治の初め
に既に瓦だったことは、古い
地図から分かるので、少なく
とも江戸時代からの地名とい
える。しかし、どこまでこの
名前が、遡れるかはわからな
い。

ところで古く昭和十七年
(一九四二)頃、この土地で
レンガ用の採土が始まった。
当時この地は、面積三ヘクタ
ールばかりの舌状台地だった
が、その土中から、採土に伴
って膨大な瓦が出土した。以
来、太平洋戦争中から戦後を
通じ、採土が行われた中で、
今も姫路市でご健在の、著名
な考古学者今里幾次氏は、当
地を数十回も訪れ、廃棄され
ていく瓦を採集されていた。
生きていくのが精一杯の当
時、捨てられるまさに瓦礫を、
採集されていた見識は、本当
に敬服されるものである。
それだけでなく同氏の研究

で、この地にはかつて多くの
瓦窯があり、生産された瓦は、
平安時代末から鎌倉時代初め
(主に一二―一三世紀初)、京
都の天皇や上皇、その関係者
の建立した数多い寺や建造物
に、使用されていたことが明
らかにされた。

現在では、神戸市の神出窯
や明石市の魚住窯・三本松窯
でも同様に、平安末から鎌倉
初期に多くの瓦が、京都など
に運ばれていることが分かり、
この時代の研究に、考古学が
大いに貢献しているのである。
こうした研究のきっかけは、

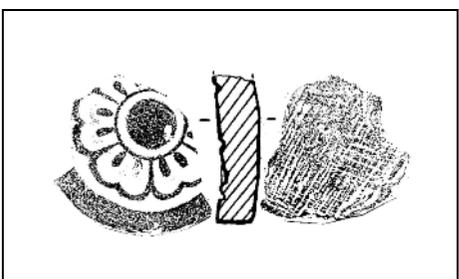
今里氏の魚橋採集瓦による研
究に始まるもので、魚橋出土
瓦は、歴史考古学研究史上で
も、重要な位置を占めている。
またこれらの瓦が使用され
た頃は、まさに源氏平家の活
躍期、魚橋の瓦と同じ瓦は、
あの後白河法皇の御所でもあ
った、蓮華王院(法住寺殿)
跡などからも出土している。
法皇の寵妃丹後局(高階栄子)
の預所関係の文書中には、播
磨における「瓦保」・「瓦庄」
などが記されている。

義経や静、後白河法皇や丹
後局は、だれにも注目される
が、実はこの時期、この地で
も多くの人々が、源平の合戦
や宮廷の動きを、敏感に捉え
ながら生きており、彼らこそ、
本場に時代を担い、動かす
人々だったのである。

「瓦」の地名は、瓦産地に
残った名前なのか、後世多く
の瓦片が土中から出るので、
この名になったのかは、わか
らないが、考古学資料から見
て重い名前なのである。

(市史編さん特別執筆者

間壁葎子)



▲ 京都・蓮華王院出土瓦と
同文の魚橋出土瓦拓本

(参考文献)

今里幾次著『播磨魚橋瓦窯跡』『播
磨考古学研究』所収一九八〇年